「川のあるまち」第２９号

花田のお地蔵さま（スナッカラ地蔵）

―花田（はなた）の地蔵を通して知る越谷市花田と葛飾区水元（みずもと）との交流―

加藤幸一

今から四百年前の江戸初期、越谷市花田と、遠く離れた葛飾区水元との間で、人的交流が見られていたことが「花田の地蔵」（「スナッカラ地蔵」）の調査を通して判明した。

【花田の地蔵、「スナッカラ地蔵」の由来】

江戸時代から、地元やその周辺で親しまれてきた「花田のお地蔵様」は、すぐ近くの人々の間では、スナッカラの地のそばにあったので「スナッカラのお地蔵様」と呼ばれることもあり、花田の区画整理事業が行われ始めた昭和五十一年（一九七六）頃より、「花田のお地蔵様」は、「スナッカラ地蔵」として紹介されるようになる。

「スナッカラ」とは、砂河原のことで、当時の「花田のお地蔵様」あたりから現在の鷹匠（たかじょう）橋までの間の古川（昔の元荒川筋）の河原跡にみられる耕地をさした。一部で「スマッカラ」と表示されるが、それは誤りである。

なお、対岸の増林（ましばやし）村の人々は、この「花田の地蔵」を「見晴らし地蔵」とも呼んでいた。この地蔵が他所よりも最も高い所（昔の元荒川の自然堤防上）に立って目立っていて、周囲を見はらしているかのようだからである。

【花田の地蔵伝説】

昔、元荒川が花田の方に花田の地を囲むように迂回して流れていた頃の話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこのお地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし堤の上に上げてお祀りしたという。

一方、「お地蔵さまの首の骨が折れて舟が動かなくなった」とか、「お地蔵さまがここに流れ着いた」という話も一部で残っている。「地蔵の首が折れたから」との話は、地蔵を初めてこの地に安置する時から首が既に折れていたとは考えにくいので、本来の言い伝え　ではないであろう。なお、花田の地蔵伝説については、詳細な話もある。その内容は次の通りである。

地蔵の石仏を載せた大型の船が、海の幸で財をなした人が、秩父の札所に送り届けたいとの希望で、海から元荒川を上ってここまで来た。さらに上流に行くために、ここでとどまり、元荒川の澪（みお）で川の水が増える　のを待っていた。増水するやいなや、一気に上流へと川を上ろうとしたが、強風にあおられて船が河原に乗り上げてしまった。そこでこの地蔵はここにとどまりたいのであろうと思い、見晴らしのよいこの地に安置された。

以上の話が、古川の対岸（新方川の左岸）にある控え土手（増林への水害を防ぐために設けられた土手道）のそばに住む増林の小島初治（はつはる）氏による先輩たちから以前聞いた話である。「みお」とは、ここでは川の中で深い所という意味で、遊水池のようであったという。現在の鷹匠橋の南東、花田第一樋門の西側あたりである。

地蔵が下流から運ばれてきたことから、海の方から運ばれてきたとの内容になったのであろう。それに今から三百五十年前からの口伝えであるから、当然、内容の変遷があり、そのまま鵜呑みにはできない。「川を上ってきてここで安置された」としての言い伝えが自然であり、後世の付け加えがあったものと思われるが、興味を引く内容ではある。

【「花田の地蔵」のルーツ】

常磐線金町駅から北に向かって歩くと、水元の地に着く。水元には、戦前の教科書にも載った大岡さばきで有名な「しばられ地蔵」のある

南蔵院という寺院がある。荒縄で地蔵尊をしばりつける信仰が江戸時代から今日まで続いている。地元やその周辺は勿論、遠く離れた地域まで知られている。

実は、水元近くの金町を本店とする、この「しばられ地蔵尊」という名からとった菓子店の支店が、越谷の地にも偶然にあり、蒲生の日光街道沿い（現、南越谷一丁目）に置かれ、外装にしばられ地蔵尊の絵が描かれた「しばられ地蔵の満願どらやき」が販売されている。

偶然といえば「正徳寺（しょうとくじ）と刻まれている花田の地蔵がこの水元の地の正徳寺からやってきた」、つまり「花田の地蔵のルーツが正徳寺（現、南蔵院）である」と秦野秀明氏の調査協力により判明した頃、私の娘がすぐそばの中学校で英語の教鞭をとっていたのには驚いた。

江戸時代の南蔵院は、大正十二年の関東大震災で被害に遭ったのがきっかけで、昭和四年十月に、旧本所区中之郷（現、墨田区吾妻橋三丁目）の地からこの水元の地の聖徳寺に移転してきた。以来、江戸時代の聖徳寺の石塔等を大切に保存してきたために、今日までしっかりと残っているのである。

花田の地蔵尊と関連した地蔵は、この南蔵院の「しばられ地蔵」ではなく、江戸初期の正徳寺の時にこの地で造立された承応三年（一六五四）の地蔵の石仏である。これが、花田の地蔵とほぼ同時期にできたという点で、花田の地蔵と兄弟分といえよう。

【「花田の地蔵」と同時期の地蔵菩薩像】

花田の地蔵には「正徳寺」と刻まれていることから（「花田の地蔵」の図参照）、江戸時代の初め頃の聖徳寺は、正徳寺と書かれていたようである。聖徳太子の聖徳と発音が同じなので、寺の名前も聖徳寺と書かれるようになったと思われる。現在でも、南蔵院には再建された太子堂があって、聖徳寺から受け継がれた太子信仰が続いていることは微笑ましい。

この南蔵院の墓地の西端には、明治十五年（一八八二）一月十七日に亡くなった聖徳寺の住職「教光院慈探大和尚」の記念碑がある。地元の多くの人によって明治四十一年（一九〇八）二月十七日に造立している。その向かって左隣に、「聖徳寺」と刻まれた享保三年（一七一八）閏十月造立の地蔵菩薩の石仏（舟型）がある。向かって右隣には、花田の地蔵（丸彫り）の造立年の承応四年正月二十六日より五カ月前に造立された承応三年八月吉日の地蔵の石仏（舟型）があるが、花田の地蔵とほぼ同時期に作られ、これがいわば「花田の地蔵の兄貴分」といえようか。今回取り上げた正徳寺の地蔵菩薩像石仏である。（「正徳寺の承応三年の地蔵菩薩像」の図参照）

【花田と水元との交流】

花田の伝説からわかる歴史的事実は、「花田の地蔵」を奉納した施主が、現在の葛飾区の小合溜（小合溜井）そばの正徳寺（聖徳寺）住職であったことから次のように推定できる。

造立された地蔵は、下小合村（現在の水元）を出発し、小合溜から現在の大場川、今はなき古利根川（八潮南公園から宝光寺の北側）、現在の中川（かつての古利根川）、現在の吉川橋で中川（古利根川）と別れて西に向け元荒川に入り、そのまま進み、現在の宮前橋より二百五十メートル手前からわざわざ東方に迂回（花田を迂回していた当時の元荒川筋、後の古川、現在は全くない）して、この花田の地を目指して運ばれたのであろう。

この花田の地蔵は、源海の三十三回忌の為に承応四年（一六五五）に建てられた石仏である。源海が亡くなった年は一六二三年であり、それ以前には源海を介して既に花田と水元との触れ合いはあったと思われ、江戸時代初期の西暦一六〇〇年前後、つまり今から四百年前には既に両村の交流があったのであろう。江戸初期の花田村と下小合村との中川（古利根川）や元荒川を介した下小合村の源海との人的交流と物資の交流が伺えられる。（「花田の地蔵のルーツとその交流ルート」参照）

なお、源海の名は、正徳寺の山号「金海山」の「海」の一字をとっ

て名付けたものであり、さらに、花田と下小合の仲を取り持つ源海は、花田に縁のある花田出身者ではなかったかとの穿った考えもできる。

【「花田の地蔵」の銘文からわかる行政区分】

現在の水元・金町地域は、江戸時代以前は香取社の見られる下総国に属していた。当時の武蔵国と下総国との境は、八潮市と三郷市の境を流れる中川、足立区南側の区境を流れる古隅田川、それに続く台東区と墨田区の境を流れる隅田川であったと推定されている。

この地域が下総国から武蔵国に編入した時期についてははっきりとわかっていないが、江戸幕府の正保（しょうほう）元年（一六四四）の「正保改定図」によると、江戸川（太日川・ふとひ）以西は、下総国に属していたことが知られている。この「花田の地蔵」に刻まれた文字の解読によって、この石仏が造立された承応四年（一六五五）には、既に武蔵国に編入されたことが裏付けされるばかりか、現在の中川を境に、既に東側が東葛西領（現在の金町・水元地域）、西側が西葛西領（亀有地域）と呼ばれ、東葛西領が上之割（葛飾区）と下之割（江戸川区）とに分割されていたこともわかる点では、貴重な石仏といえよう。

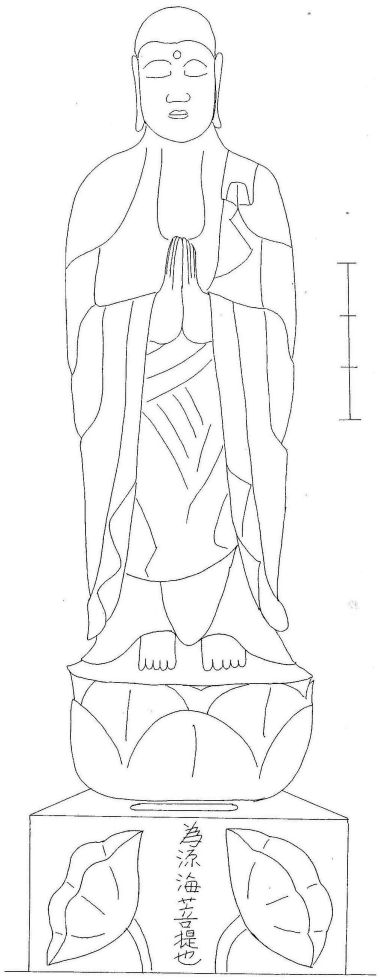
【「花田の地蔵」の昔の位置】

区画整理事業前の花田の地蔵は、古川に沿った自然堤防上の野道の路傍（現在の花田三―一〇あたり）にあり、南西向きに他の石仏と一緒に並んで立っていたのである。移転先は、花田四―二〇―一三の佐藤家南側路傍である。

【越ケ谷の久伊豆神社、花田の西円寺の薬師堂、花田の地蔵の三ヶ所の参詣】

越ケ谷の久伊豆社から「せんげん堀」（新方川）に架かる鷹匠橋に通じる村道があった。花田に嫁いできた嫁は、赤ちゃんが生まれた時（男の子は二十一日目、女の子は三十三日目）は、この村道を利用して最初は越ケ谷の久伊豆（ひさいず）神社にお宮参りをし、その次は花田の西円寺（さいえんじ）の境内の薬師堂、そして最後に花田の地蔵尊に立ち寄ってお参りをしたのである。

花田の人々は、花田のお地蔵さまが昔から子供を守ってくれる仏様として、区画整理事業の開発で他所に移転した今でも、花や線香をお供え、大切にしている。



台石の向かって右側面の文字

武州葛西領
東葛西之庄
上ノ割下小合
村
正徳寺
施主敬白

かつての花田の地蔵尊（スナッカラ地蔵）

1985 年に撮影した石仏群（スナッカラ地蔵含む）。向かって右端には、新土手（地蔵の裏）が造成中で、新方川の花田第二樋門が設置されている。

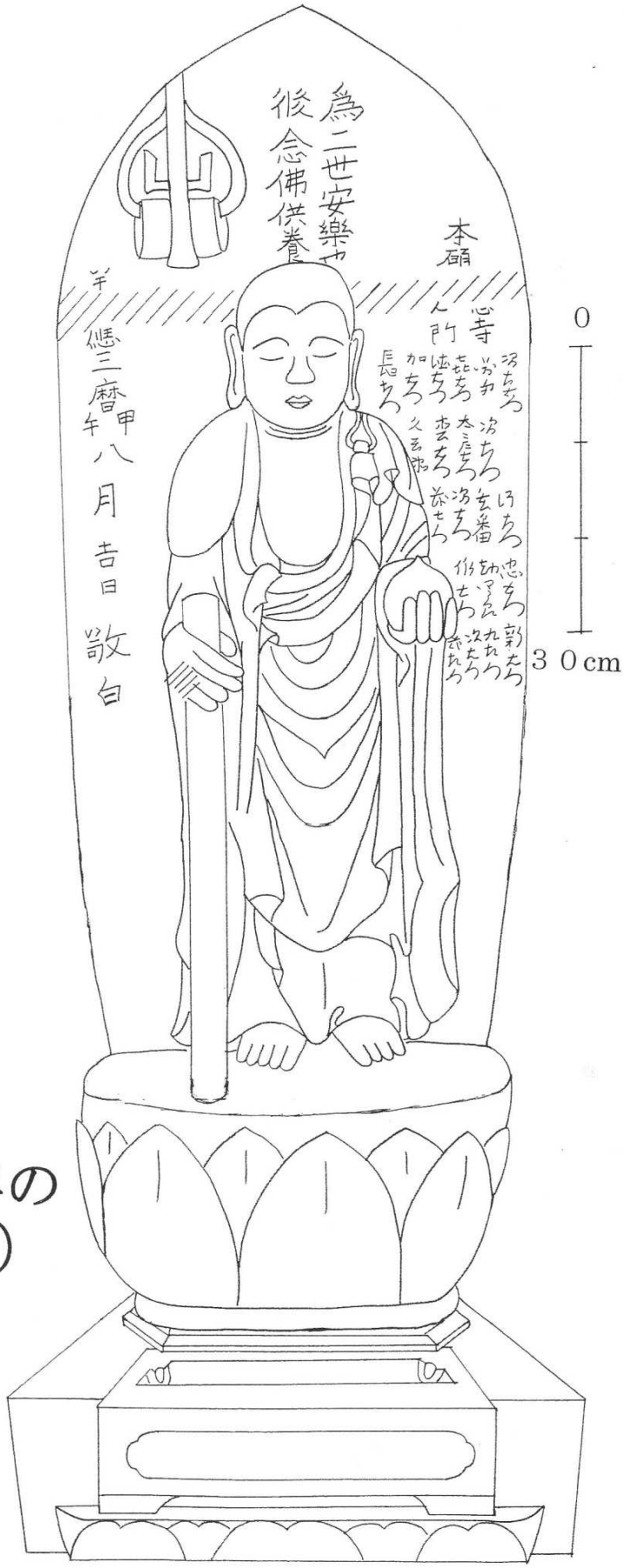
上記の写真２点の提供は秦野秀明氏。

為二世安楽也
修念仏供養

（正徳）　次左右衛門
□□寺　□　□　次左衛門　得左衛門　忠右衛門　新右衛門
本願　喜右衛門　太郎左衛門　玄　番　勘四郎　九左衛門
（祈願所カ）　徳右衛門　杢右衛門　次右衛門　作右衛門　次右衛門
□□□　加右衛門　茂右衛門　茂左衛門
久兵衛
長右衛門

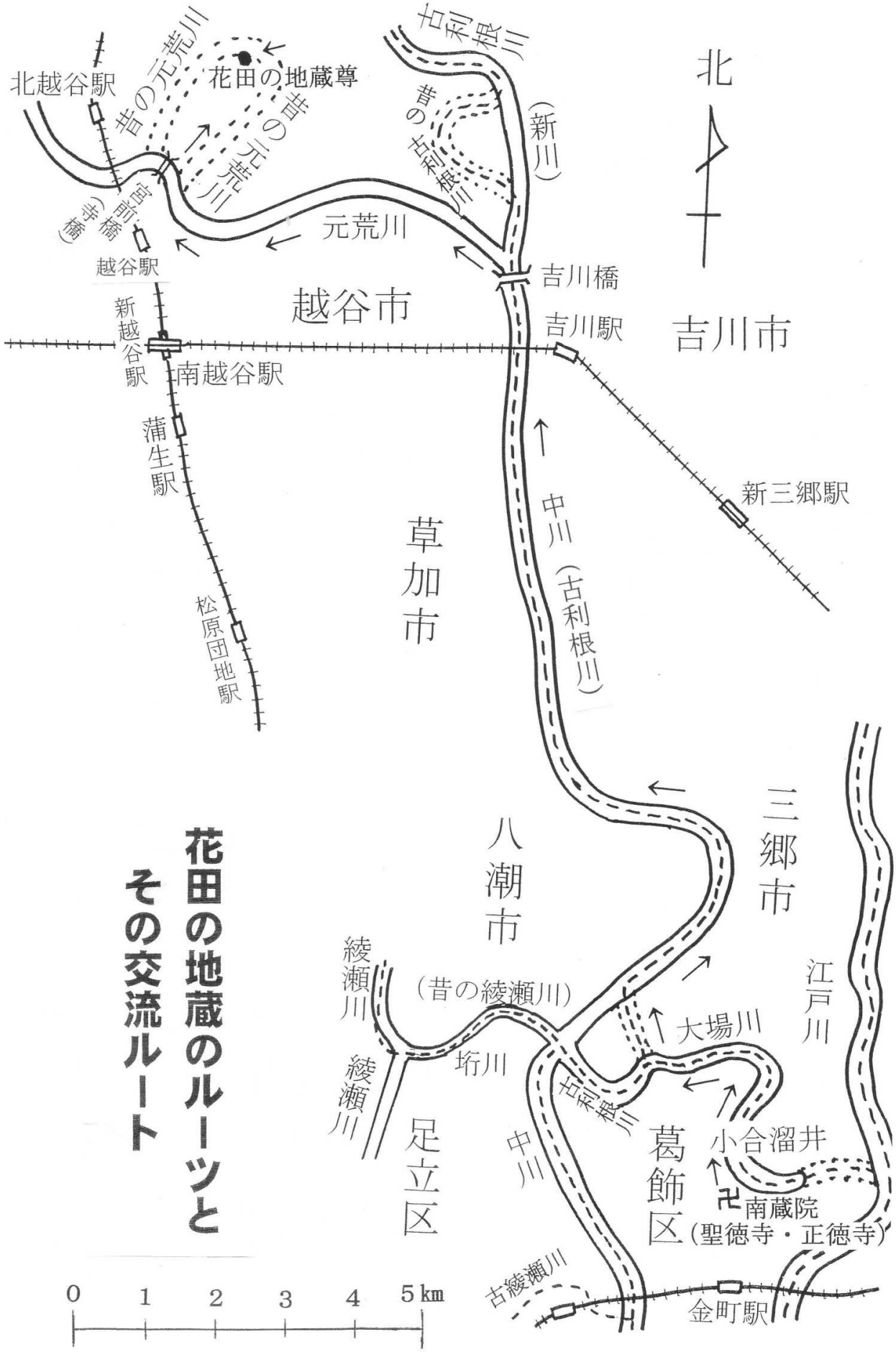
（承応）
兼應三暦　甲午　八月　吉日　敬白

（左手宝珠・右手錫杖の地蔵菩薩立像）



正徳寺の承応三年の（聖徳寺）（１６５４）
地蔵菩薩像

葛飾区東水元の「南蔵院」（しばられ地蔵）墓地



花田の地蔵のルーツとその交流ルート

花田（はなた）の地蔵尊の新旧所在地

「ゼンリン住宅地図　越谷市」（2006 月 12 月）を元に作成

○「花田ハ元荒川押（おし）廻り、天狗の鼻の先の如き組ゆへ、鼻田と称するを花田と書替（かきかう）。」（『越ケ谷瓜の蔓』より）

・花田（はなた）村は、元荒川が[その村の周囲を迂回しながら流れ]廻り、天狗の鼻の先のようになっている共同体なので、[本来は]「鼻田」と称するのだが、「花田」と書き換えて[今日に至って]いる。

・つまり、花田の村名のいわれは、「花の田」ではなく、村の周りに元荒川が流れ、村が天狗の鼻のような形をしていて、田が広がっているからだという。

・しかし、花田の「はな」とは、「鼻」という意味ではなく、「端（はな）」という意味に解釈して、「越ケ谷郷の端（はし）にある田」という意味から名付けられたと考えるのが妥当だと思う。（加藤幸一私見）

・なお、越谷市役所発行「越谷市史第四巻・史料二」４６頁では、「花田ハ元荒川押迫り」と「迫り」となっているが、「廻り」の誤植である。